

安部公房の「奉天」体験 ——満洲教育専門学校付属小学校の英才教育を中心に——

木村 陽子

キーワード：満洲教育専門学校、奉天、安部公房、英才教育、実験学校

1

のちに『砂の女』（新潮社、1962年）、『他人の顔』（新潮社、1964年）などの著作でワールド・ワイドの名声を得た作家、安部公房〔1924-1993〕。「故郷喪失者の文学」、「ボーダーレスの思想」、「曠野の人」など、彼に冠せられる言辞では必ずといってよいほど「満洲出身者」であることが強調されるが、にもかかわらず、1歳で父母とともに渡満してから22歳で引揚げるまでの17年を過ごした「奉天」（現在の中国東北瀋陽市）で、実際に彼が何を経験したのかという点については、どの年譜、どの先行論も踏み込んだ言及をしていない。それはなぜだろうか。

たとえば安部は奉天について、以下のように言及している。

私が育った奉天というところは、あの殺風景な満洲の中でもとくに殺風景な町である。ある外国の旅行者が、世界で一番きたない都市だと折紙をつけたという話を聞いた記憶があるが、本当かもしれない。（中略）それでも、その殺風景さにかえって心ひかれるとしたら、それはやはり故郷であるためであろうか。たしかに、故郷に準ずる町ではある。しかし、故郷であると断言できないのはなぜだろう。私の父は個人的には平和な市民であった。しかし日本人の全体は武装した侵略移民だった。たぶん、そのせいで、私たちは奉天を故郷と名乗る資格をもたないのだ。そうかといって、ほかに故郷と呼ぶ場所もない。奉天にいるときは日本の夢を見、日本に帰ってきてからは奉天の夢を見る。私はときどき自分が故郷の周辺をさまよいながらついに中に入れないアジアの亡霊であるかのような気持ちになってくるのだ。「鎖を解いたアジア」という言葉に、センリツに似たよろこびを感じるのも、そのためであろうか⁽¹⁾。

戦後の安部が奉天について何事かを語ろうとすれば、その根底に常に《自身らはそこに侵略

（1）安部公房「奉天——あの山あの川」『日本経済新聞』1955年1月6日号、『安部公房全集4』新潮社、1997年、484頁。

移民として暮したのだ》という後ろめたさが伴い、結果、語られる内容はいつも否定的言説とならざるを得なかった。後年のインタビューで彼は、「なつかしように満洲の思い出話をする連中の気が知れない。植民地支配された人間の内面にたいする想像力の欠如」⁽²⁾だと語っているが、そうした信条のゆえに、安部は満洲に関してごく限られた文章しか残さなかったばかりか、その経験を近親者にさえ多くは語りたがらなかった。そのことが、半世紀以上を過ぎた今、当時を知らないのちの世代にとって〈安部公房と満洲〉というテーマを論じ難くさせている理由となっていることは疑い得ない。

しかしその一方で、在奉天日本人の社会生活に言及した先行研究自体がそもそも手薄であるということが大きく関係しているように思う。《在満日本人の社会生活の復元》という、同様の問題意識を持つ先行論として出色であるのは塚瀬進の『満洲の日本人』（吉川弘文堂、2004年）であるが、本書も指摘するように、「帝国主義政策の検討」を前面に据えた論とは一線を画した、在満日本人の生活自体に焦点を当てた研究は意外なほどに少ない。塚瀬前掲書では、主として日系移民第一世代の足跡を当時の新聞、人名録、満鉄社員家族による投稿雑誌を駆使して検証し、在満日本人の特徴を、流動性が高く、それゆえに土地に対する愛着がとぼしく、異なる故郷を持つ人々の集合体であったため、自由な振る舞いが可能であったと結論している⁽³⁾。

ところが、とりわけ「土地に対する愛着」の点で、親世代と子世代では少なからず印象を異にしており、稿者が過去5年間に行なった聞き取り調査でも複数の人が「われら在日本奉天人」

と称していたように、実際には数年しか彼の地に身を置かなかった人たちも含め、多くの子世代が今日に至るまで奉天に強い帰属意識を抱き続けているのである。これを「郷愁」と一蹴してしまうことは容易いが、しかしまずは彼らがそこで体験した社会生活の内実を一次資料として記録する必要があるのではないか。

このような問題意識から、以下本稿では、奉天の日本人中上流階層が享受した極めて恵まれた生活環境の一端を証すべく、特にその子弟たちが通った満鉄創設の公教育について、具体的には安部公房が通った満洲教育専門学校付属小学校（以下「教専付属小学校」、のちに奉天千代田小学校と改名）の先進性を、安部を6年間持ち上がりで担任した宮武城吉の学級を例に検証してみたいと思う。前述したように、安部自身、奉天での経験を多く書き残しているわけではなく、また本稿の意図も安部の個人史への関心に止まらず、より広く奉天の子世代たちが享受した社会生活の実相の究明にあることから、本稿では1930-1945年までのうちの3年以上を奉天の新市街で過ごした経験のある日本人子世代、22名（うち13名は教専付属小学校・奉天千代田小学校の出身者）を対象に、聞き取り調査、およびアンケートを実施し、それらの一次資料を活字資料と併せて参考とした⁽⁴⁾。

周知のとおり、奉天は清の時代には都が置かれたこともあった由緒ある古都であったが、1905年9月、日露戦争が終結しロシアから日本へ東清鉄道および関東州の租借権が移されたとき、中国人たちの旧市街である城内の西方約3.3kmの地にあった奉天駅周辺は、ロシアの満

(2) [インタビュー] 安部公房・（聞き手）栗坪良樹『錨なき方舟の時代』『昂』1984年1月、『安部公房全集27』新潮社、2000年、158頁。

(3) 塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文堂、2004年、171-173頁。

(4) 2008年6月から9月にかけて奉天千代田小学校同窓会、奉六会に所属する22名の方々にアンケートおよび聞き取り調査を実施した。

洲における都市建設がハルビン・大連・旅順等に集中していたため、いまだ一面の曠野であった。しかし天然資源に富む満蒙のほぼ中心に奉天は位置したため、1906年に設立された南満州鉄道株式会社（以下「満鉄」）は、この地を経済都市とすることに定め奉天駅を中心に601haもの鉄道付属地を設定し、莫大な投資額を注ぎ込んで日本人のための新市街を建設したため（1937年11月時点では満鉄の市街経営投資額第1位）⁽⁵⁾、1930年代には奉天新市街は満洲有数の商工業都市へと変貌していた。この601haという規模は、同時代の内地の市街地開発が1910年大阪・池田室町の市街地開発がわずか7ha、1922年川崎・八丁畷分譲地が65ha、有名な多摩川台・田園都市の開発（1923年）でさえ80ha⁽⁶⁾であったのと比較しても圧倒的なものがあった。

また奉天新市街は、線路の西側を工業地区、東側を商業地区に分け、格子状の街路を建設の基本とし、斜交する形で駅や将来市街地となり得る場所を直線で結ぶ。この方法は格子状街路の欠点である斜め方向の交通の便を図るとともに、街路の景観に変化を与える点でもすぐれ、満鉄は学校、病院、公共施設、公園、さらには軍駐屯地や花柳街に至るまで、徹底した計画のもとにそれらを配置した⁽⁷⁾。

以下、1930-1945年のうちの3年以上を奉天・新市街で過ごした経験を持つ子世代22人に行った聞き取り調査、アンケート結果に基づき、奉天日本人の社会生活（衣食住）の一端を浮き彫りしてみたい。

前述したように、奉天の新市街は満鉄が曠野の只中に一から計画することが可能であったため、商業地区、工業地区、文教地区、住宅地区、軍駐屯地、花柳街など徹底した区分けのもとに

開発がなされた。そのため父母の職種や階層ごとに、ある程度まとまった住み分けがなされ、日本人社会内部の階層差を当人たちでさえ意識しにくい状況が作られていた。たとえば満鉄の社宅制度を例にとると、満鉄社員には学歴差、民族差などに基づき「職員」「雇員」「傭員」といったランクがあり、それに応じて社宅に等級（特甲・甲・乙・丙・丁）が設けられるなど、社内に徹底した階級制度が敷かれていた。

特甲・甲社宅は洋間と女中部屋と庭を持つ、その多くは二階建て戸建邸宅であったが、それらは奉天では千代田通り、平安通りといった奉天のメインストリート付近のいくつかの区域に集中的に建てられ高級住宅街を形成していた。他方、奉天駅付近や鉄西工業地区には、比較的若い世帯が入居する乙型社宅街が多く建てられた。しかし乙とは言え、上下水道、ガス、スチーム暖房、二重窓も完備した近代的3DK型（6・6・4.5畳）アパートメントが多く、しかも一帯がほとんど同じ規格であったため、少なくとも子世代たちが住居に関する格差を意識することはあまりなかった。稿者の実施したアンケート結果では、上下水道・ガス・暖房の完備100%、電話96%、子ども用1人部屋所有率66%などに見られる住環境の先進性と、引越しの頻度の高さ（有効回答18件中45%が奉天内での引越しの頻度が3回以上と回答）が目を引く。頻繁な引越しは、人口の急増に伴い都市が急激に拡張され、新興住宅街がどんどん郊外へと延びていったこと、そして親たちの社会的地位がかなり速いペースで上昇していったことを意味していたと考えられる。

次に食環境であるが、アンケート結果からは、奉天日本人の子世代たちが総じて日本の1960年

(5) 越沢明『植民地満洲の都市計画』アジア経済研究所、1978年、24頁。

(6) 社団法人 都市開発協会編『民営鉄道グループによる街づくり一覧——明治43年から平成15年まで』都

市開発協会、2003年を参照。

(7) 井上道代『荒野に建設された奉天』『高千穂会報』第35号、2004年4月、21頁。

代以降の大都市圏の食環境を先取りしたかのような、食の多様化、無国籍化を享受していたことがわかる。一例を挙げると、食した経験に関する調査では〔飲料〕ではカルピス100%、紅茶・サイダー94%、緑茶・牛乳・お汁粉88%、ココア・ジュース・甘酒58%、ラムネ52%、ミルクセーキ35%など。〔西洋料理〕ではライスカレー100%、コロッケ・ハム・ソーセージ94%、オムレツ82%、ロールキャベツ76%、牛ステーキ・ボルシチ59%、ハンバーグ・ピロシキ53%、マカロニ・ポタージュ47%、スモークサーモン41%、ビーフストロガノフ30%、スパゲッティ24%など。〔中華料理〕では餃子・肉まん100%、シュウマイ82%、チャーハン76%、春巻・火鍋子・叉焼71%、酢豚65%、北京ダック・アワビ料理53%など。〔和食〕では天麩羅・すき焼き88%、湯豆腐76%、寿司71%、刺身・うどん・とんかつ59%、そば・おでん・鰻の蒲焼・肉じゃが53%など。〔菓子〕ではチョコレート・煎餅94%、ケーキ・クッキー・アイスクリーム82%、ボンボン・ゼリー53%、ガム・プリン47%、アップルパイ35%、心太29%など。

逆に今日と違う点はどこにあるか。まず子世代の兄弟姉妹の多さが目立ち、全体の56%が兄弟姉妹5人以上と回答している（「一人っ子」は0）。使用人雇用率64%というのも際立った数値である。しかしそれ以外の点では、外食経験率88%、母の洋装率71%、およびパーマ率53%（戦況が深刻化する以前）といった結果からも、〈都市型・中上流階層〉という類型を抽出することが可能である。

食の無国籍化、住環境の近代化に加えて、各種アンケート結果からは娯楽面での西洋化（テ

ニスやカメラを趣味とする父親、庭にブランコ、洋犬の飼育、ドッグレース、女兒の習い事としてのピアノ・ヴァイオリンなど）、身近に異民族（中国人、朝鮮人、白系ロシア人、欧米人など）はいるが交際の程度は家庭によりまちまちであるという状況、さらにはルーツとしての日本文化（年中行事、父母の和装、女兒の習い事としての踊りや和琴など）が一選択肢と化し、それを重んじるか否かは家庭によりまちまちであるという特徴は、むしろ今日の都市社会と親和的であり、奉天日本人の子世代たちは、彼らが内地に引揚げてのちに経験したであろう都市社会の生活を少なくとも20-30年、彼の地で先取りして経験していたことになる。

2

以上のような特徴を有する奉天新市街の、中でもメインストリート付近に位置する高級住宅街で安部公房は生い立った。1924年、満洲医科大学助教授であった父・浅吉が国立栄養研究所に派遣されていたときに東京で生まれ、翌1925年、父母とともに渡満した彼は、教専付属小学校（1930-1936）、奉天第二中学校（1936-1940）に学び、1940年、単身東京に出て成城高等学校理科乙類に進学。1943年9月、同校を戦時教育体制下の在学年短縮で繰り上げ卒業し、東京帝国大学医学部医科に進学した。

試みに、彼の奉天での生活の一端を、彼の弟（井村春光、公房より3歳下）、妹（福井康子、12歳下）、さらには小学時代の級友たちから得た証言を基に記してみたい⁽⁸⁾。

(8) 井村春光氏の証言は2009年5月10日から12日にかけて、北海道札幌市の井村氏宅で、福井康子氏の証言は2009年7月8日、埼玉県ふじみ野市の福井市宅で稿者が行ったインタビューに基づく。ただし、弟の春光氏は3歳のときに母の実家である北海道に養子に出、13歳のときに再び奉天に戻っていること、また

妹の康子氏は13歳年下と、かなり公房と歳が離れている事情もあり、特に小学校時代については安部自身の言及、および宮武学級の級友・千葉胤文氏、武藤英一氏、故・児玉久雄氏、宮武城吉氏の娘・山根カリミ氏から得た証言を多く参考とした。

安部が小学校時代を過ごしたのは、奉天駅より垂直に伸びた新市街のメインストリート、平安通付近に位置する奉天市葵町26番地（「区」制の施行は1937年12月より）にあった満鉄の甲社宅、上下水道、ガス、暖房、電話、二重窓を完備し、洋間や女中部屋もあったレンガづくり戸建て平屋の高級社宅であった。1938年、彼が14歳のとき、父が満洲医科大学をやめ奉天市鉄路総局人事局保健課に勤務することになったが、それを機に将来の内科開院を見越して、父は市内有数の高級住宅地であった大和区紅葉町4番地に2軒つづきの2階建て戸建を新築した。近所には奉天市副市長をはじめ、満鉄上層部や満洲医科大学の教員、各種企業の重役などが多く居住していた。春光氏によれば、2軒の家は後に、左側の1階が診療所、2階が家族の住まい、隣の1軒は1階に居間と台所があり、そのほか入院患者用の病室が4部屋あったという。左側の家の1階は、8畳の診療室と6畳の薬局、玄関脇には父の写真現像用の暗室があった。2階は階段をあがると、右側に8畳の部屋が2部屋と台所があり家族が食卓を囲んだ。右に曲がると4畳半の本棚が置かれた倉庫があり、そこを春光氏は自室としていた。8畳間のうちの1部屋は父母の部屋、もう1部屋が長男の公房の部屋。そのほか10坪程度の庭があり、暖房は石炭のボイラー暖房だった。使用人はボイラー炊きのボーイ1人と、中国人の通いの女中が2人、さらに日本人の通いの看護婦が6人ほどいたという。

父浅吉は独身時代には白系ロシア人の家に下

宿し、ドイツ・ハンガリーに遊学経験もあり、留学試験をエスペラント語で受験するなど、コスモポリタンを自任するような人物であった⁽⁹⁾。また9種類のカメラやたくさんの器具・薬品を揃え、少年だった安部にも「4×4サイズのローライレフ」、「ツアイスのスプリングカメラ」、「発売されたばかりのパール」というカメラを買い与えていた⁽¹⁰⁾。夏には一家で避暑地を訪れ、冬にはスキー好きの父が応接間に板を並べた。庭にはシェパード用の犬小屋があった。開院してから待合室となった広間でダンスパーティーが開かれたこともあった。仕事に生真面目だった浅吉は、急病人が出れば夜中でも往診に応じたが、往診には自家用車のダットサン（日産）で出かけたという。

こうした生活は、奉天の日本人エリート階層では必ずしも珍しいものではなかったが、とりわけ本稿が注目するのは、安部が教専付属小学校で受けた特殊教育についてである。本校は、1924年9月に満洲教育専門学校が設立されて2年5ヶ月後の1927年2月2日、その西隣に教専の学生の実習と研究の場として、奉天市では第4番目〔敷島1906年、春日1908年、弥生1922年〕に開校した公立小学校である。この教専付属小学校に安部が学んだのは開校から4年目の1930年から1936年までの期間であり、1935年12月時点での職員数は26名、児童数は838名、1937年9月時点での職員数は29名、児童数は尋常科542名、高等科は40名であった⁽¹¹⁾。途中、1933年の教育専門学校の閉校に伴い、本校は「奉天千代田小学校」に改称されている。この教専付属小学校について、安部の前年に入学し本校で6

(9) 谷真介『安部公房評伝年譜』新泉社、2002年、7頁。

(10) 安部公房「ぼくと写真」、『群像』1956年4月、『安部公房全集6』新潮社、1998年、56頁。

(11) 2009年6月から8月にかけて、奉天千代田小学校同窓会前会長の遠藤和子氏、奉天高千穂小学校、奉天第二中学校出身者である荒木恒夫氏、奉天加茂小学校出

身者である黒子恒夫氏、滋賀大学経済学部教授・阿部安成先生の協力を得て、奉天市の学校史についてできる限り詳細な年表を作成した。その結果の一部は、2009年8月8日のアジア教育史学会・第18回大会、2009年11月9日の滋賀大学経済学部・第5回アジア・スタディーズ・ワークショップで口頭発表した。

年間学んだ衛藤藩吉は、後年「満州でうけた教育」という一文で以下のように言及している。

台湾にパブリック・スクール風の教育を導入しようと努めた後藤（引用者注、満鉄初代総裁・後藤新平のこと）は、満鉄時代もまた子弟の教育に深い関心をはらった。この精神は後藤が去って後も、満鉄に残ったようである。南満医学堂、南満中学堂（中国人子弟のための中等教育）、あるいは新開地に不似合なほど内容の豊かな大連、奉天の両満鉄図書館の設置など、忘れられてはならない。特に教育専門学校をつくって初等教育のための優秀な人材の養成を志したことは識見卓抜と申すより他あるまい（当時内地では初等教育の先生は師範学校つまり中等教育で養成されたのとくらべて見よ。満鉄の教育専門学校は中等教育を終わってからでなければ入学できなかった⁽¹²⁾）。

その衛藤が、2007年9月29日、人生の終幕にあたって以下のような言葉（書誌未載）を残していることは意味が重い。

中国といかに付き合うのか、ということが私の生涯の課題であり同時に悩みとなった。（中略）私の父は満鉄に勤め、奉天で図書館長をしていたが、父も、己の言説のゆえに、その影響を受けた多くの部下の人たちが、のちに同様の苦しみを背負うことになったのではないかという煩悶に心を悩ませていたと思う。こうした課題、悩みを生涯にわたって、抱き続けざるを得なかったことは、残念といえば残念である。私は、もっと気軽に人生を

生きられたかもしれない。父と同様に、中国に対する思い、煩悶、あるいは、人間の持つ弱み、贖罪の苦しみ、といったことを、自ら超越し得ないまま過ごした生涯であったように思う。何か暗い内容の御話になってしまい恐縮だが、私は帝国主義者の父を持ち、それゆえに良く整備された教育を受ける機会を与えられた。そのおかげで、今日の私がある。これをどう理解し、受け入れたらよいのか。贖罪でよいのか。単なる平和論者として振る舞えばよいのか。このことに、一生を通じて悩み続けている⁽¹³⁾。

衛藤の述べる《「帝国主義者の父」を持ったがゆえに享受し得た高度な教育》というのが、具体的に何を指していたのかは言及されておらず、詳細は不明である。しかし、たとえば衛藤の翌年同校に入学した安部公房の場合を例にとるならば、教専付属小学校の特徴として、大きく以下の6点を挙げることができる。①少人数教育（40人学級）の実施、②教員の学歴の高さ、③施設の充実、④分団教育の実施、⑤特殊教育の実施、⑥各教員に課された研究課題—教育の実験校としての性格。

これらの内容については適宜後述するが、まずはその前提として満洲教育専門学校の性格について確認しておきたい。

3

それまで各地居留民会が経営していた満洲における日本人子弟の教育事業を、「満鉄」という一企業が成り代わり行うようになったのは、1906年8月、満鉄が通信、大蔵、外務の三大臣

(12) 衛藤藩吉「満洲でうけた教育」『後藤新平月報』勁草書房、1966年、『衛藤藩吉著作集別巻』東方書房、2005年、8・9頁。

(13) 第2回満蒙研究会（桜美林大学北東アジア総合研究所主宰）での開会挨拶より。衛藤氏は当会の座長を務めておられた。本会の開会挨拶が衛藤氏の座長としての最後の出席、最後の言葉となった。

から「其会社ハ政府ノ認可ヲ受ケ鉄道及付属事業ノ用地内ニ於ケル土木、教育、衛生等ニ関シ必要ナル施設ヲ為スヘシ」という命令を受けたことによる。関東州では関東都督府が直接教育事業に当たったが、奉天のような付属地は日本人が治外法権を行使できる「租界」に準じた特殊地域ではあったが、その行政権があいまいであったため、政府は付属地内の教育を満鉄に委託したのである。

1919年6月、満鉄は付属地の小学校の増設、中学校の開設に本格的に着手するために、新たに学務課・衛生課を新設した。当時の中西清一満鉄副社長は、両課兼任の課長の人選に際して内務省に適任者の紹介を依頼した。このとき内務省が満鉄に推薦したのが、当時、愛知県事務官・工場課長兼産業課長をしていた37歳の保々隆矣であった。保々の着任時、すでに満鉄の教育事業は11年を経過しており、日本人を対象とした満鉄経営の教育機関が小学校20校、中学校1校、高等女学校1校、家政女学校10校、実業補習学校33校、中国人を対象とした教育機関が公学堂11校、中学校1校、日語学堂2校、実業学校2校、朝鮮人を対象とした普通学校2校、さらに幼稚園、補助学校などがあった⁽¹⁴⁾。

着任早々、各校を視察して廻った保々はすぐに小学校校長会議をひらき、「満鉄教育の現況は全く内地教育の延長」だと不満を述べ、以後、中国語教育の奨励、教育研究所の拡充、教員研究会の改組、中学校の増設など、さまざまな改革に着手していった。しかし官僚出身であった保々は学校行政に必ずしも精通していたわけではなかったため、1921年10月、洋行（英・仏・独・伊・瑞・米）の許可を得、1年半をかけて欧米で教育視察を行った。そして国民水準の向上のためには教員養成機関の充実が不可欠であ

ることを痛感した彼は、帰国後約1年間の準備期間を経て、1924年9月、満洲教育専門学校を設立、自らその初代校長に就任した⁽¹⁵⁾。

こうして始まった教育専門学校は、1学年40名、国漢系の文1、地歴系の文2、博物系の理1、理数系の理2の4部制をとる3年制の高等専門学校であり、イートン・ハーロー型の英国紳士教育に範を求めたとも言われるように、内地の師範型教育を嫌った保々は、制服は背広にタイとし、また教師と学生が1対1の関係を築けるチューター制度を理想とした。しかし、なんといっても教育専門学校の最大の特徴は、「まず教師の給料を上げ、生活をよくし、父兄からも、社会からも尊敬の眼で見られるようになって、はじめてよい教育ができるのだ」という保々の持論に根ざした、学生側への全給費制（30円）、卒業後の好条件の就職保証（満鉄職員の場合、本俸73円）、教授側への内地の数倍の俸給、満鉄社宅の貸与、鉄道パスの支給といった、破格の厚遇をもって学生・教員を迎えた点にあった。その結果、学生側では貧困家庭層の多くの秀才が、教授側でも内地の一流大学に劣らない逸材が、奉天の地に集結したのである⁽¹⁶⁾。

試みに『満洲忘じがたし』（陵南会、1972年）巻末名簿をみると、校長（計3名、うち2名は東京大学出身）、教授・講師（計51名）陣のうち、東京大学出身者は9名（うち選科1名）、京都大学出身者11名（うち選科2名）、そのほか東京高等師範（5名）、東北大学（3名）、ハーバード大学、フィラデルフィア大学、コーネル大学、キングスカレッジ（英）、北海道大学、東京外国語大学、神宮皇学館、広島高等師範、東京音楽学校、東京美術学校、明治法学校、陸軍大学校、陸軍士官学校、第一高等学校、第二高等学校、秋田師範学校、南満医学堂（各1名）

(14) 竹中憲一『保々隆矣略伝草稿』陵南会、1996年、7頁。

(15) 前掲『保々隆矣略伝草稿』9-26頁

(16) 陵南会編『満洲忘じがたし』満洲教育専門学校同窓会・陵南会、1972年、第一編を参照。

など、多くの名門校が名を連ねられている。

のちに安部らの担任となった本校の第4期生である宮武城吉によれば、その年の受験は定員に対して40倍もの応募者が殺到し、合格者の多くは出身校で上位5番以内の優秀者揃いであったという⁽¹⁷⁾。そうした教専の学生たちの実習と研究の場として付属小学校が設立されたことは前述したが、本校では内地の公立小学校が1学級80人を上限としたのに対し、当初40人程度の少人数教育が目指された（のちに奉天の日本人人口が激増したため、50人学級が普通となり、宮武学級も卒業時の児童数は50人であった）⁽¹⁸⁾。また初代主事・寺田喜治郎（教専の国文学教授と兼任）は東京高等師範卒、2代目主事・畑中幸之輔（教専の教育学・倫理学・英語教授と兼任）は京都大学卒、その他教員も高学歴揃いで、各高等師範の卒業者、あるいは教専のトップクラスの卒業者たちが集められ、高学年では各教員がそれぞれの専門科目を教授する学科担任制が取られていた。

また本校は、指導法においても独特の、個性尊重の気風があった。宮武学級の1人である千葉胤文によれば、彼らのクラスが音楽を習った村岡楽堂（祥太郎、1881－1940、教専の音楽講師を兼ねた）は、「満洲国国歌」の作曲も手掛けた満洲を代表する音楽家であったが、シュベルトを髣髴とさせる堂々たる風貌もさることながら、教え方も独特であり、音楽室にあったテーブル型の大型蓄音機の前に校舎に別途備えてあったマイク・スピーカーを構え、音質を高めて様々なクラシック音楽を聞かせたという。あるときは「ウィリアム・テル序曲」を何

度も聞かせて、4つの部（「夜明け」「嵐」「静寂（牧歌）」「スイス軍隊の行進（終曲）」）のそれぞれの情景の違いを熱心に語ったという。村岡は小学1年から五線譜の読み上げをさせたようで、千葉はそれが大そう難しかったという。

また宮武学級が体操を習った齊藤兼吉（1895年生れ、1919年東京高等師範卒、教専の体育講師を兼ねた）は、万国オリンピック大会に出場した元体操選手であり、その後、欧州体育界を視察した経験から各国の競技に精通していた。千葉によれば、齊藤の授業では武道を除いたあらゆるスポーツを子どもたちに試みさせ、素質があると認めた子には続けるように促したという。競技の種類は、記憶にあるだけでも、鉄棒、鞍馬、平行棒、吊り輪、デンマーク体操、幅跳び、マラソン、ボクシング、スケート、ハンドボール、蹴球、ラグビー、ソフトボールなどがあつた。さらに宮武学級が図画を習った小倉圓平（1892年生れ）は、当時奉天北陵土産として知られた〈圓平人形〉の作者でもある著名な陶芸家であった。彼もまた小学1年から子どもたちに白い胸像のデッサンをさせ、才能のある子を見つけては長所の伸長に努めていたという。

他方、教専付属小学校は機構・施設の面でも先進的であった。本校には、当時まだ内地では珍しかった「特別学級」（具体的には心身障害児を対象とした「補助学級」、虚弱体質児を対象とした「養護学級」）が設置されていた⁽¹⁹⁾。また千代田通りの一帯には、安部の父が勤務した満洲医科大学、その他の中・高等教育機関、衛藤の父が館長を勤めた満鉄奉天図書館、日露戦争の奉天会戦の英霊たちを祀った忠霊塔、さ

(17)『師の傘寿を記念して』宮武先生傘寿記念事業本部、1986年、11頁。

(18)『満鉄付属地経営沿革史・上巻』（南満洲鉄道総裁室、1939年）によれば、1907年当時、満鉄付属地内の児童数は262人に過ぎなかったのに対し、1915年には3485人、1920年には8539人、1925年には11173人、1930年には14811人、衛藤が小学校を卒業した1935年

には29444人にまで激増している。403・404頁。

(19) 補助学級の詳細は、佐藤隆博・戸崎敬子「旧満洲日本人学校における『特別学級』の実態〔Ⅰ〕——満洲教育専門学校付属小学校（奉天千代田小学校）の事例を中心に」（『高知大学教育学部研究報告』43号、1991年）を参照されたい。

らには千代田公園や国際運動場といった文化施設が集中し、文教地区の景観を呈した一画であったが、そのほぼ中心に建設された本校はそうした立地にもふさわしく、講堂や児童図書室（宮武が創設、管理）、さらには複数の工作機械を有する工作室、1人に1台の顕微鏡も整った理科教室、図画教室なども完備した近代的教育施設であった。

千葉によれば、たとえば彼らが手工（今日の「図工」）を習った日向和夫は、本物の鉋、鋸、鑿、糸鋸、定規などの大工道具一式を4年進級時の児童に買わせたといい、手工の時間になると彼らはそれらを持って工作室に行った。工作室は二教室ぶち抜きで作られた建材工場のようなところで、大型バンドソーやモーターで動く円盤鋸、10数台の糸鋸ミシン、旋盤まで設置されていた。日向はそれらの道具や機械の使い方だけを教え、後は具材を与えて子どもたちに好きなものを作るよう促したという。ある者は模型飛行機作りに没頭し、ある者はボール紙や木や電池を用いてミニトラックを作った。千葉によれば、科目にかかわらずほとんどの教科で先生は子どもたちにそのように接し、個性伸長を最優先した教育が行われていたという。

1941年10月、奉天千代田在満国民学校から神奈川県藤沢の国民学校に転校した中沢英昭は、級友がみな下駄か裸足で、水道はなく井戸を使用し、講堂も図書室も校歌もない学校の様子に愕然としたというが⁽²⁰⁾、以上のことから奉天の公教育の先進性は、内地に比しても群を抜いていたことは明瞭である。

しかし、教専付属小学校の最大の特色は、「優良児」教育の実験校としての性格に求められるであろう。当時、全満の小学校教師を対象とした研究発表会が、教専付属小学校の主催で

毎年行われていたが、「教専付属」という性格上、本校には全満小学校の指導校的役割が期待されていた。そのため本校の教員には、そこでの発表を前提とした研究課題が各々に課されていた。たとえば宮武学級では、日々の授業に多読の励行、速読指導が取り入れられ、それを通しての早教育が試みられていた。ところが惜しむらくは、そうした教専関係者を中心とした実験教育の具体的内容が、今日ほとんど書き残されていないことである。その意味で、実験教育の内実がある程度まとまった文章の形で残され、しかもその教育を享受した当事者たちが現存する宮武学級の事例は、今日極めて貴重であると言えるのである（詳細は後述）。

日本の公教育における特殊教育の歴史は、古くは1890年長野県松本尋常小学校の「落第生学級」、1896年同県長野尋常小学校の「晩熟生学級」、1901年群馬県館林尋常小学校における劣等児教育などに始まるが⁽²¹⁾、多くの場合、それらの主たる対象は心身障害児、学業遅滞児などの「劣等児」であり、「優良児」に対する特殊教育は、それまでにも一度、東京高等師範学校で案が出されたことはあったが、実行にまでは至らなかった⁽²²⁾。

しかし「優良児」教育は、当時の先進諸国における時代の趨勢であった。たとえば19世紀末のアメリカでは、都市部の移民の増加などによって学級間の能力差が拡大し、一斉授業が不可能となる事態が社会問題化していた。そのため1900年前後より都市部の多くの公立学校に、「異常児（exceptional child）」を対象とした特別学級が設置され始めたのである。留意したいのは、この「異常」という語の範疇に、心身障害、精神障害などとともに「優良児」も含

(20) 『十三歳の証言』奉天千代田小学校17回生同期会、2003年、50頁。

(21) 精神薄弱問題史研究会編『人物でつづる障害者教

育史〈日本編〉』日本文化科学社、1988年、15・16頁。

(22) 稲垣真美『ある英才教育の発見』講談社、1980年、13頁。

まれていたことである。アメリカでの「優良児」学級の設置は、「劣等児」学級の設置にやや遅れ、1900年ニューヨーク市に始まり、以後1920年代まで増え続けた。その内容は、1915年ごろまではアクセレレーション（進度の促進）が主であったが、1915年ごろより急激にエンリッチメント（教育内容の豊富化）へと転換されたという⁽²³⁾。

そうした状況を欧米視察などの際に目の当たりにした日本のエリートたちが、「優良児」教育に多大な関心を持ち始めた。乙竹岩造が日本で最初に「優良児」だけの特別学級の必要を説いたのは1912年（『穎才教育』目黒書店）。Dewey〔1859-1952、米・教育学者〕の実験学校〔1896-1904〕の影響を受けた沢柳政太郎が、自身の主宰する成城小学校で個性尊重の少人数教育を開始したのが1917年。そして、日本最初の「優良児」教育の本格的試みとなった京都府師範学校附属小学校の「第2教室」が開校したのが1918年（『育英十年』大空社、1997年）のことであった⁽²⁴⁾。そして、それに遅れること9年、外地・奉天の満鉄付属地という特異な地域で、教専附属小学校による実験教育⁽²⁵⁾の試みが開始されたのである。

1905年6月1日、香川県三豊郡山本町に宮武城吉は生まれた。たまたまそれが旅順城陥落の祝賀提灯行列があった日であり、そこから「城吉」の名がつけられたのだという。その後1918年3月、大野尋常高等小学校を卒業し、1922年4月、香川師範学校に進学。本校の校長は石川義次、教員には石森延男がおり生涯の恩師となった。娘の山根カリミによれば、宮武は1924年3月に師範を出て2年ほど内地で教壇に立ったが、失望の念が大きかった。そのため1926年、師範時代の校長であった石川が大連の神明高等女学校へ、恩師石森が同年4月より大連の南満州教科書編集部へと移っていた縁から教育専門学校の情報を得、翌1927年4月、本校の第4期生（文科1部、専門は国語）として進学した。そして本校をトップクラスの成績で卒業した翌月の1930年4月、教専附属小学校に配属となり、彼にとっては最初で最後の教え子となった学級児童たちに出会ったのである。恩師宮武の80歳の祝いに、教え子たちが編集した文集『師の傘寿を記念して』（宮武先生傘寿記念事業本部、1986年10月、発行人は千葉胤文）の中で、宮武

(23) 宮本健市郎『アメリカ進歩主義教授理論の形成過程』東信堂、2005年、第2章を参照。

(24) 京都府師範学校附属小学校「第二教室」は、時の京都府知事（1916年就任）・木内重四郎の強力なイニシアティブの下に創設された。木内は1888年東大法学部政治学科を卒業後、法制局に入り、1888年から1889年にかけて国会開設のため欧米諸国を視察、このときの経験から能力別（優・中・劣）分室教室の必要を説くに至った。木内は東大予備門時代、沢柳政太郎、上田万年と同級で親交も深かった。その木内の下で「第二教室」のプラン作成の中核を担ったのは、1913年から1916年まで欧米各地で最新の実験心理学を学び、帰国したばかりの野上俊夫（京大文・心理学科主任教授）であった。「第二教室」で試みられた「優良児」教育の内実については、寺崎昌男監修『育英十年』大空社、1997年、前掲『ある英才教育の発見』を参照。

(25) 教専出身者（および関係者）による実験教育の試みは、1930年、教専3・4期生を中心として設立された奉天加茂尋常小学校でも意欲的に取りくまれた。前掲『満洲忘じがたし』では、「当時の教専の卒業生は各地の学校に一名二名と入り込んで、その学校の空気の中に呑みこまれてしまっていた」、「保々さんはそれを齒がいく（ママ）思われて、教専の卒業生だけの学校を作り、その成果を発揮させようと決心された」、「しかし、加茂の設立を保々さんが単独で思い立たれたか、付属にいた玉利が前波さんにねだり、前波さんから保々さんに進言されたのか、そのへんが明らかでない」とされる。加茂小学校の実験教育の内実は、小島勝「満鉄附属地における日本人学校の研究——満洲教育専門学校から生まれた奉天加茂小学校」『龍谷大学論集』448号、1996年を参照。

は当時を以下のように回想している。

当時の附属は研究学校実験学校として特殊な存在だった 私には読書指導と云う課題とその研究対象として君達と六ヶ年の機会が与えられた 私は馬車馬のようにつつ走った私の働き盛りを潰した（中略）読書指導が私に与えられた研究課題である。国語教育の能率化は寺田さんの持論であった 当時 寺田さんは従来の教科書一辺倒の国語教育を痛烈に批判し 多くを読む国語教育を提唱された「本を読む力は 一にも多読 二にも多読これに優る良薬なし」とくに低学年の時は面白い本さえ与えておけばそれで良い 薄っぺらな教科書に金科玉条とかじりつきそれを飴のように長々と一年中引き伸ばされては子供が可愛そうだ 教師の下らぬ独りよがりの詮索は子供にとっては迷惑である 伸びる子供の天性を引っぱる冒流行為でもある そのためには何はさておき 児童図書室を整備せねばならない」 着任早々寺田さんから次のような課題が与えられた 「低学年の高率な読書指導を研究課題としてみる うんと読ませてどの位伸びるか 思い切って読ませてみる 恐らく六ヶ年の義務教育は四ヶ年で済ませるのではなからうか」 私は夢中で実行した 君達には迷惑だったか知れないが 一応予期した成果を得て卒業させた〔「君達の学習記録」『師の傘寿を記念して』〕

日本の小学校での多読教育の導入は沢柳政太郎の成城小学校に始まるが、沢柳は1920年6月、「読むこと、書くことは並行しない」（『教育問題研究』第3号）と題された一文で、「読むことは書くことよりも早く始めるのが至当」であり、「書くことに頓着なく読みかたをどしどし

進め」るべきだとする「分量主義」を提唱している。そしてその直後に、校内に児童図書室を設置、翌年には読書科の授業を開始している（『教育問題研究』第11号、64頁）。対する宮武の多読教育の開始は、成城小学校に遅れること10年であったが、この試みは宮武の言及にもあるように、初代主事・寺田喜治郎の発案と指導によるものであった。多読による国語教育の能率化、作文における写生文の励行は寺田の持論であり、宮武以外にも教専の第2期生・亀川馨も寺田の指導の下、撫順の永安小学校でこれを実践していたが⁽²⁶⁾、注目したいのは当時まだ内地でも一部の選抜児童を対象に始められたばかりであったそれを、一般公立同様、所定の学区に住まいする無選抜児童を対象に、教専関係者が試みている点である。その成果について、宮武は次のように述べている。

かくして入学のその日から読書指導が始まった 児童図書室と各家庭手持ちの読物の開放と融通について家庭にも協力を呼びかけた学校と家庭の共同戦線を張ったわけである（中略）各家庭に於ても可成りの児童読物を持っていた テレビと漫画の普及した今日との比較は難しいが 雑誌類を除いて 平均一五冊持っていた これ等を融通交換し合って読むことを奨励した（中略）最も多いものは一年間に三一八冊四四〇〇〇頁 次は二七二冊四八〇〇〇頁 月別に見ると最も多いのは十二月の一月間に五四冊九三九八頁読んだものもいる（中略）読むと云う雰囲気が充満し 競って読んだことも事実である 多くを読めば当然の結果として速く読めるようになる 速く読めると云うことは読書にとっては決定的な必要条件である（中略）ここで細かいことに触れる気はないがただ一つ 読む速

(26) 前掲『満洲忘じがたし』134頁。

さの伸びる時期の限度と云うことである 小学校五年生頃がピークでなかろうかと その後練習なり特別の訓練をすれば伸びることは伸びるがすぐまた元に戻ると 寺田先生はよく話された だからこそ小学校に於ける指導が必要だ 後々になってとり返しの付かないことになるとも強調された アメリカの心理学者のヒューイ（ママ）博士は十二才頃が限度だと当時発表されている 吾々の調査からもそれに近い結果が出ている [「君達の学習記録」『師の傘寿を記念して』]

しかし驚くのは、宮武が多読のみならず、速読教育にも着手していることだ。草島時介によれば、速読の歴史は1875年、VolkmannやLamanskiによる読書中の眼球運動の速度の研究にはじまり、つづいて1878年、フランス・ソルボンヌの眼科医、Javal [1839-1907] の鏡影法（Mirror-Method）の考案により本格的研究が開始されたという⁽²⁷⁾。日本では1919年、松尾長造の『読書の心理学的研究』（心理学研究会）が速読紹介の嚆矢であり、本書で松尾は欧米最近年までの速読研究の成果を紹介するとともに、それら諸理論に基づき、日本人老若男女を被験者として行ったさまざまな実験結果を発表している。そして1930年4月、教専付属小学校に赴任した宮武は、この松尾の書に基づき小学校に入学したばかりの児童1クラスを対象に、6年という期限の中で（「外地」という地域の性格上、生徒の編転入は頻繁だったが）、日々の授業を通してさまざまな実験を試みたのである。

たとえば宮武学級に小学3年から5年まで在籍、後に日銀総裁となった三重野康は、

宮武学級に転校して間もなく、先生が国語の読本を普通に読む人、横にして読む人、逆さにして読む人を指名して同時に読ませた。私は逆さにして読まされてびっくりした。[「半寿」『師の傘寿を記念して』]

とその授業の奇抜さに言及し、また学級児童の母・白土菊枝は次のように回想している。

（※宮武先生は）一年生の時代には眼の筋肉が発達する時期なので、内容をつかむ、理解するという点は先ずさしおいて、機械的でよいから読み方の速度を早めることに力を注ごう、と私ども父兄母姉たちにご説明なさいました。この眼の筋肉の発達が進むと、新聞の一行は一瞬で読めるようになるし、更に熟練すると数行を瞬間に読みとるようになる、こうした力を持つことは、勝れた読書力を身につけることを意味しているから将来成人した時に、優秀な能力をもった人間となっているということであるが、この眼の筋肉の発達する時期はほぼ六年生の頃に限定される、この適期をのがしてはいけなないと、詳しく話されました。[「変った教育のかずかず」『師の傘寿を記念して』]

宮武が父母らにこのように語ったのとはほぼ同時期、内地では土屋周作著『教育的心理学』（大明堂書店、1930年3月）が出版されていた。本書で土屋は「ブスウエル」（米）の「児童の眼球運動」の研究結果に基づき、「第二学年から第三学年に進む間は進歩の割合が極めて著しい。第四学年第五学年以上は進歩するけれども其の割合は低学年のそれと比較にならぬ」、「読

(27) 松尾長造『読書の心理学的研究』心理学研究会、1919年、第1章を参照。

書の際に於ける眼球運動の調節法は尋常第三学年が過ぎるまでに大体に於いて習得されるものと見做してよろしい」(413頁)と言及している。しかし宮武は、当時の最先端の速読教育の情報を外地・奉天でどのように入手していたのだろうか。これについて、たとえば千葉胤文は以下のように証言している。

僕たちが3、4年生のときに(引用者注、1932-1933年)、宮武先生は集中的にロールシヤハテストであるとか、知能テスト、心理テストのようなものを行いました。少なくとも春秋1回ずつは定期的にありました。それらのテストは東京から送ってこられるようで、東京高等師範の付属小学校と連携してやっていたようです。東京高等師範の教授たちも満洲の教育の現状に興味があったんじゃないでしょうか。当時、教専に山本六郎先生という方がいたのですが、その人が何か東京高等師範の先生たちと関係を持っていたようです。

『満洲忘じがたし』巻末名簿によれば、山本六郎は教専の数学・物理学教授で、京都大学理学部を卒業後、ソルボンヌ大学に留学しフランスで理学博士号を取得、京城大学予科より着任した人物であるとされる。生年月日などその詳細は明らかではないが、経歴から推測して1910年代後半から20年代前半頃京都大学に在籍していたものと思われる。そのころの京都大学は、1913年から1916年まで欧米各地で最新の実験心理学を学び、帰国した野上俊夫が文学部心理学科主任教授に就任、その直後、彼のプラン作成により1918年、京都府師範学校付属小学校・第

2教室で「優良児」教育が開始されている。また山本の留学先であったソルボンヌは、Javalによって速読研究が開始された地でもある。そうした研究環境から、「優良児」教育に関しての某かの人脈を山本が持ち、教専付属小学校と東京高師付属小学校の速読研究における連携に一役買っていたのかも知れない。

また教専との関係で言えば、同校の心理学教授であった朝日直樹が京都大学文学部卒で、児童心理や実験心理を専門としていたこと⁽²⁸⁾、さらに前述の寺田喜治郎が東京高師卒であったことも、あるいは関係していたかも知れないが、少なくとも1933年には、当時文部省・国語読本編纂委員でもあった東京高師付属小学校の馬淵冷佑が、教専付属小学校に講演旅行に訪れている⁽²⁹⁾。また宮武学級の1人、検見崎喬は「覚えていますか、当時の東京高師の付属小学と、同じ問題でテストして、僕達が遜色なかったこと 皆んなで喜び合った事」(「思い出」『師の傘寿を記念して』)と言及しており、以上のことから、宮武の速読・多読教育の試みが、教専教授たちも含む小学校側の強力なバックアップの下に、さらには内地の英才教育実践校との連携の下に、大がかりに行われていたことが窺えるのである。

果たして「六ヶ年の義務教育は四ヶ年で済ませる」とした寺田の言葉どおり、速読・多読の成果は早教育を可能とした。中原大昌によれば「学力のある者にはどんどん上学年の教科書が与えられた。六年生の時に中一程度の代数をマスターした者もいたし、先生のすすめで英語を勉強した者もあった」という。また学級上位10人前後の児童に対しては、必修科目だった中国語のほかに、各家庭の協力を得て英語とドイツ

(28) 前掲『満洲忘じがたし』92頁。

(29) 前掲『満洲忘じがたし』135頁。

語の家庭学習を課したとされ、医者の父を持つ安部公房は将来を見越してドイツ語を選択したという。

こうした速読・多読教育の実践について、宮武は以下のように総括している。

読書力がつくと同時に他の教科にも学力の増強となって現れた。かくして四年間を過ごした。最初に想定した通り、国語の方面では大部分の生徒に六年生の力がついた。係数的な裏付け調査も出来た。そこで五年生より上位半数の生徒は、出来るだけ図書室へ追いやり、もっともっと自由に多量の読書指導に専念した。お陰で私は教壇授業から解放され、気が楽になると同時に時間的にもかなりの余裕が出来た。この浮き時間は、残りの下位半数の生徒にふり向けた。遅れ勝の低位生には、それだけ密度の細かい授業が出来、落ちこぼれ防止にもなり、上位児は画一的均一授業から解放され、好むところに向って縛られることなく、十二分に翼を伸ぶことが出来た。〔「君達の勉強の記録」』『師の傘寿を記念して』〕

さらに、宮武学級ではいくつかユニークな教育方法が日々の授業に取り入れられていた。その1つが学級をいくつかのグループに分けて、各々に自主運営させる「分団教育」の試みである。1933年4月に内地の学習院初等科から同校に転校し、小学4年から6年まで宮武学級に席を置いた児玉久雄は、転校当時の衝撃を以下のように綴っている。

それまで学習院初等科で謹厳な関根先生にお習いしていた私は、宮武学級に入ってびっくりしてしまった。まず驚いたのは机の並べ方。全部が黒板の方に向かっていてではなく、月曜組から土曜組までの六つのグループ

に分かれ、一グループごとに机を集めて、テーブルを囲むような形で坐っている。そして授業——いや授業というよりはジュニア学術会議といった方がよいだろう——は、生徒たちの討論を全体として、先生がそれをリードするというユニークな形であった。〔「思いあたる節々」』『師の傘寿を記念して』〕。

こうした「机の並べ方」は、教師が一方的に教授する画一的授業を打破する目的で、Deweyの実験学校が取り入れていた方法である。ここで想起したいのが、前掲、宮武が速読に関して言及していた箇所、彼が「アメリカの心理学者のヒューイ（ママ）博士は十二才頃が限度だと当時発表されている。吾々の調査からもそれに近い結果が出ている」と述べていたことである。執筆時の彼が80歳の高齢であったことから、この「アメリカの心理学者のヒューイ」が「デューイ」の誤記であったと推測され、さらにはこの言及から、1930年代の宮武がDeweyの実験学校の試みを情報として知り、且つ少なからぬ影響を受けていたであろう可能性を指摘できるのである。

また「分団教育」についてであるが、これはグループ別に討議などを行わせながら授業をすすめる方法で、日本でも大正自由主義教育運動の中で推奨され、一部の内地の私立学校ですでに導入されていた。これについて中原大昌は、以下のように言及している。

先生の教育は極めて独創的なもので、クラスは六つのグループに分かれ、それぞれリーダーが責任をもってとりしきり、全体を代表する級長はいない、いわば連邦制の運営体制であった。各グループにはこのほかに訓練係、勉強係、体育係等があり、学校生活は我々の自主運営に任せられるところが大きかった。授業中こっそり少年倶楽部などを読んでいと

先生は気づいていても知らぬ顔、訓練係が「〇〇君!!」と大声で注意する。注意を受けるとバッドマークが一個つく、十個になると罰当番となる。というところから探しのようだが注意に納得がゆかねば反論が許され、このため先生の授業が中断してもかまわなかった。訓練係自身が注意を受けるとマークはいっぺんに二個つけられるというユーモアもあった。[「ほのぼのとした思い出の数々」『師の傘寿を記念して』]

宮武学級では月曜組から土曜組まで1グループ8人で形成され、自分の曜日になると、掃除も授業準備も先生の手伝いも班全員で担当した。その中でさらにリーダー、勉強係、訓練係、体育係、理科係、図書係、衛生係などが決まっていた。グループ分けは3年生進級時に、だいたい地域別に近い者同士になるよう宮武が決めた。これは、班ごとに成績を競い合わせることもあり、放課後班員同士で勉強がしやすいようにとの配慮からであった。係の割り振日も宮武の決定に依った。安部公房は学習係であった。そして、たとえば何か体育に関してクラスで決めなければならないとき、6班それぞれの体育係が集まり相談して決めるといった方法で、「連邦制の運営体制」が敷かれたのである。

また授業の進め方にも独特なものがあった。中原は以下のように証言している。

先生の質問に「ハイ」「ハイ」と手を挙げ指名を待つことはなかった。「ハイ」といって自ら立ち上り答える。同時に二人立ち上った時は当事者同士で優先順位を決める。決まるまで先生は黙って待っておられた。なぜ自分が答えたいかを論争するので、この論争自体が質問の答えになることもしばしばであった。[「ほのぼのとした思い出の数々」『師の傘寿を記念して』]

とりわけ国語の授業は個性的であった。千葉胤文は次のように証言する。

宮武先生の学校の机の抽斗には、原稿用紙が束になって入っていて、それで先生が、誰でも持って行ってよいから、何か書いて来いと言うんです。先生は何か本を読ませるとすぐに「感想!」と言います。とにかく一行「つまらなかった」でもいいから何か書いて来いと言ひ、持っていくと、そうか、そういう風に読めるのか、といった感じでした。書き方が上手とか下手とか、そういうことは言わなかった。それから先生はよく我々に「擬人法」ということを言われました。たとえば『吾輩は猫である』のように、君たちも何を見ても、あれは何を考えているんだろう、と自分に置き換えて見直しなさいとよくおっしゃいました。

これは寺田喜治郎が励行した作文教育の、宮武流の指導法であろう。また宮武の授業には「引き伸ばし」と呼ばれた連想発表法があり、矢部正典は次のように回想している。

教科書をみんなで一読したあと、先生がそこに書いてあることの意味合いなど順を追って説かれる段階で、これはとおもわれることばなりフレーズなりを適宜ピックアップされ、その記述から連想ないし推測される事柄や情景などを生徒に拡大思考させ、それを各自の自由意思で発表させるという趣向です。[「思い出あれこれ」『師の傘寿を記念して』]

児玉久雄によれば、宮武はわからない語句を調べさせる際に、1. 一般的な意味、2. 似た表現、3. 例文作成、4. 語感、5. 参考事項に分けて考えるよう指導したとされ、児玉の当時のノートには、たとえば「たどり着きたり」

の語句に対し、「よろよろと倒れそうになって木にもたれる。うえからは無情な雪が降りかかる。此処もだめだ。僧はあばら家の方に近よって来る・・・」⁽³⁰⁾と書かれてあったという。あるいは末松優は、ベートーヴェンの月光の曲の読本を読んだときの連想発表において、安部公房が「彼は、その時、水を満々とたたえたバケツを頭の上にかかげて、一滴もこぼさないように大事にかかえて来た思いをピアノにブツケルようにして作曲したに違いない」と発言し、「この学習係の頭の中は一体どんな仕組になっているのかと感心した」(「ヒカリさん人形の話」『師の傘寿を記念して』)と回想している。

この末松の回想を受けて、児玉久雄は安部公房との思い出を以下のように述懐している。

彼には、このような飛躍した連想・発想の才があり、私には無かったらしい。であるから二人は、時々衝突した。なかでも忘れられないのは、巻12第25課「港人」という詩についての論争である。

夢にのみ見し山川も
あけくれしたひし家も
まのあたり近く迫りぬ
かもめ飛ぶ海をすべりて
船は今朝筋かに帰る
懐かしき故郷の港

はやて吹くやみにただよひ
寄るべなき海にさすらひ
思出の深き船路や
つつがなく今日しも果てて
船は今静かに帰る

懐かしき故郷の港

うるはしき真玉、白玉
にはひよき木の実、草の実
うづたかき積荷の中に
海山の宝を載せて
船は今静かに帰る
懐かしき故郷の港

私はこの詩を夕暮の光景として描写した。すると、安部君が立ち上って、いや違う、これは朝の光景である、と言い張るのである。級友たちは私の応援をしてくれた。しかし孤立無援の安部君は頑として聞き入れない。私も言いたかったからには黙っていない。到頭、宮武先生までが加わって、「安部！朝、家に帰るのは泥棒ぐらいなものだよ」と言ったが、安部君は益々いきりたつだけであった。ところが論争しているうちに、私はふと気持ちが変わった。待てよ、もしかすると安部君の方が正しいのかも知れない……良く考えて見ると、夕闇迫る静かな港に滑るがごとくに入って来る一隻の船——というイメージは、常套的過ぎるのではないだろうか。何も全部の船が夕方に帰港しなくてもよいのである。出漁の準備をしている船、勇しい若者たちの掛け声、その中をただ一隻、長い航海を終えて安らぎの港に戻って来た船がある——そして最後の一節に見られる希望と活力。学校を終えての二人きりの帰り道。私は安部君に、「君の方が正しいかも知れない。あれはやはり、朝の光景かも知れないね」と言った。残念なことに、その後の二人の対話の内容には記憶がない。議論好きの二人のことだから、題材を広げて、さらにしゃべりまくったことであろう⁽³¹⁾。

(30) 児玉久雄「安部公房や私たちが受けた国語教育」『学習院大学言語共同研究所紀要』第16号、1993年、99・100頁。

(31) 前掲「安部公房や私たちが受けた国語教育」、100—102頁。

日露戦争の雄、児玉源太郎の孫で、爵位（伯爵）を持つ級友として学級内でも一際異彩を放つ存在であった児玉は、のちに学習院大学教授となり、シェークスピア研究に生涯を捧げるようになったが、彼は教員人生の最晩年に、「私がこれまでに、やってみたいと思いつけて来た教育のすべてが、あの宮武学級に原型を持っていたのではないか、結局、私はその夢に、到達できなかったのではないか、という悔いが残る」⁽³²⁾という言葉を残している。

こうして宮武城吉は、6年間持ち上がりの児童たちに速読・多読を通しての早教育を試みた成果を、1932年から1937年までの間に計10本の論文にまとめている⁽³³⁾。その結果は、卒業時の学級児童50人中（彼らの多くが学徒出陣、戦死、ソ連抑留、引揚げ、復員、復学等の辛苦を舐めながら）、東京大学8人、京都大学2人、満洲医科大学5人、その他、満洲建国大、旅順工大、ハルピン工大、九州大、名古屋大、早稲田大、慶應大、法政大、明治大、日本大、中央

大、拓殖大、山梨工高、大分高商への進学者を輩出したこと、『師の傘寿を記念して』に文章を寄せた22人を見ても、その中に博士号取得者5人、医師4人、歯科医師1人、弁護士1人、大学教授3人が含まれていることは特筆に価する。

しかし、外地・奉天に花ひらいた、こうした先進的教育の試みも、安部らが卒業した1936年を最後に終わりを告げた。翌1937年には、教育も含む30年続いた満鉄の付属地行政が満洲国に正式に移譲され、1933年3月の教育専門学校の廃校以後も引き継がれた「付属小学校」（当時は千代田小学校）の実験校的性格は消滅し、本校は一般公立小学校と同等になった。同時に、再び1年生を担任し、速読・多読教育のさらなる考究を重ねようとしていた宮武の企図も水泡に帰した⁽³⁴⁾。衛藤瀋吉が「私は、帝国主義者の父を持ち、それゆえに良く整備された教育を受ける機会を与えられた」と語った、その際立って恵まれた教育環境は、実質的には彼らの小学校卒業とともに終焉を迎えたのである。

(32) 前掲「安部公房や私たちが受けた国語教育」、96頁。

(33) 宮武城吉の残した直筆メモによれば、著述は以下のとおりである。「教育の能率化」『満洲教育専門学校付属小学校』1930年7月／「本校低学年に於ける郷土教育」『満洲教育専門学校付属小学校』1933年10月／「低学年国語教育の過程と考察」『満洲教育専門学校付属小学校』1934年5月／「職場を語る」『満洲教育』1934年10月／「読方考査法」『満鉄教育研究所紀要』

1935年5月／「児童図書質の管理」『満洲教育』1935年8月／「読書能力診断テスト」『教専付属』1936年2月／「書字学習」『満洲教育研究所紀要』1936年8月／「現代教育の検討」『満洲教育』1937年12月／「児童図書室経営の実際」『満洲教育研究所紀要』1937年9月。

(34) 在満日本人教育調査委員会（1936年設置）が30年にわたる満鉄の教育行政からの撤退を決定したのと同じ頃、宮武は新京へ転勤、在満日本大使館教務部、兼、在満日本教育会主事となった。